

## 9. 建築物

### 9-4. 屋外の構造

長万部に住んでいたオグラ・ハンザブロウという和人がアイヌのことを詳しく調べ、長万部のアイヌが持っていたものを集め博物館のようなものを作りました。その建物はエカシ・ケンル ekasi kenru と名付けられた。エカシ・ケンルとは、「先祖の尊い家」という意味だ。「段ぶき」の家で、力弥氏が指導して作ったので、その写真から書き写した絵が図8である。

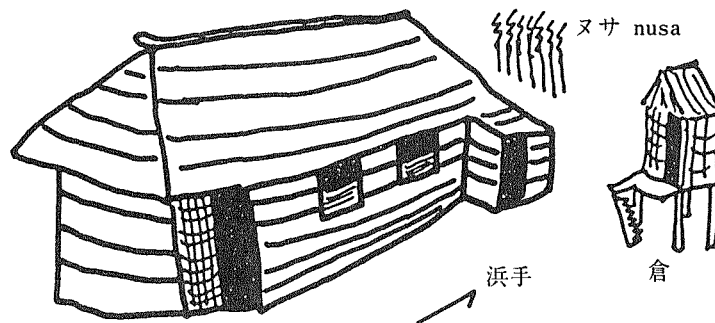


図8. エカシ・ケンル

ヌサ nusa (祭壇) は、家の浜手寄りに立っている。浜は、東南東の方角にあたる。

[司馬菊正氏]

力弥氏の住んでいた家は、現在の菊正氏の道路をはさんだ向いにあった。現在は、ホタテ漁の漁具を置く空き地になっている。その浜寄りに漁船が陸揚げされている。菊正氏は現在、ホタテ、ホッキ、カレイ中心の漁業を営んでいる。

力弥氏の家の配置は、図9のようである。家のヌサの配置は、エカシ・ケンルと同じで、浜寄り、ヌサに面して窓があり、ヌサには熊の頭骨が置いてあった。ヌサの向かって左はムルクタヌサ murkuta nusa といった。

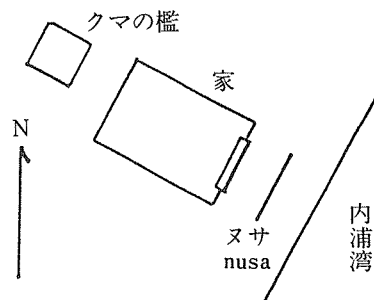


図9. 司馬力彌氏宅の配置

クマを入れた檻は、家の西北西にあった。クマを獲りに行く山(標高1520mの狩場山を中心とした狩場山地、あるいはそれに続く長万部岳)が西北西の方角にあるからだ。

[司馬菊正氏]